

笹原はひねもす動き光りつつ雀数羽を遊ばせてゐる

水本 光

「笹原」を主語にして、あたかも笹原が意志ある生きもののように表現する、現代社会のせせこましさから自由な独特の世界が楽しい。

子は出でて夫婦ふたりでさんま食ぶ骨のみ残す余生のたのし
間宮清夫

家族が主題の作に「さんま」が出てくるところが、古くて新しい。子供たちが家にいたころは、はらわたを残す者、頭を残す者など、さまざまだったなあ、そんな感慨を読んでいいのだろう。ただ、「余生」という語はやや大げさか。

左耳がつぶれるほどの沈黙をフェイクグリーンに暗
松本実穂

沈黙を……聞く、という文脈を下句の働きでどれだけリアルティをもたせられるかが勝負の一首。「フェイクグリーン」とは、本物の植物に似せて作られた人工の観葉植物のこと。「フェイク」という語が強くひびき過ぎるのが残念だが、作者の意図したところは充分に読める。

黒々と尻の肉叢盛り上がり野の臭い立つニホンカモ
尾上 宏

今月の六首はみなニホンカモシカがうたわれている。作者の住む長野県の白馬村では、季節によって近くまでニホンカモシカがやってくるのだろうか。この作、ニホンカモシカの存在感をつたえて重量感のある一首に仕上がっている。

短歌の現在

No.490 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

ひしひしと戻り来る鮭 根気よく待つ岸の熊空舞う
鴉 蔵田道子

冒頭の「ひしひしと」が心に残る。秋の北海道沿岸。熊も鴉も、鮭の遡上を確信していて、根気よく、何時間でもまちつづけるのだろう。あとどれぐらい待つかわからないが、「待つ緊迫」が伝わってくる。

飛び出した隙間に本は司書の手で嵌め戻される 自
由が終る 武藤義哉

今月の一連の主人公は図書館の本である。本の立場から図書館を見、人間を見る趣向。「飛び出した」を最初に持つてきて、本が自分の意志で……、の意味を読者にわかりやすく提示して、成功した。

名前まだなかりし頃の新駅を友のごと見つ異動のあ
とは 倉石理恵

二〇二〇年に開業した山手線の新駅「高輪ゲートウェイ駅」にかかわる作。山手線では四十九年ぶりの新駅とか、ずいぶん話題になった。じっさいは知らないが、新駅が見えるオフィスに作者は勤務していたことがあるらしい。電車の駅を「友のごと見」というイレギュラーな表現で、思い入れの深さを表現したかったのだろう。

パイパイをさよならと知り幼子はすべり台にもパイ
パイをする 平山志保

言葉を理解しはじめたころの幼児である。今脱いだ靴にも、入ったばかりの風呂にも、パイパイとあいさつするのだろう。幼児の歌のパターンといえはその通りかも知れないが、「すべり台」という具体的な名詞を使つて